

- 220 東亜堂と佐々木邦訳『全訳ドン・キ
ホーテ』 70
- 221 佐々木邦、長隆舎、山縣悌三郎の内外
出版協会 74
- 222 『独歩名作選集』とその後の内外出版協
会 77
- 223 大町桂月編著『文章宝鑑』と『書翰文
大観』 81
- 224 独歩社と『獄中之告白』 85
- 225 前川又三郎、前川文栄閣、小島烏水
『日本アルプス』 88
- 226 六盟館と新渡戸稲造『ファウスト物
語』 92
- 227 三陽堂、東光社、三星社と菊池山哉
『婦人之友』と『羽仁もと子著作集』 97
- 228 白揚社、三徳社「民衆科学叢書」、有楽
社「平民科学」 104
- 229 田中英夫『山口孤劍小伝』と京華堂・
文武堂『東都新繁昌記』 108
- 230 クロボトキン『相互扶助論』、『飼山遺
稿』、泰平館書店 112
- 231 光風館、中興館、矢島一三『八洲漫筆』
同人社、大島秀雄、石浜知行『闘争の
跡を訪ねて』 115
- 232 大原社会問題研究所と同人社『日本社
会主義文献』第一輯 119
- 233 楠山正雄『近代劇十二講』 123
- 234 博文館「近代西洋文芸叢書」とシユニ
ツツラア、楠山正雄訳『広野の道』 126
- 235 富山房「模範家庭文庫」と平田禿木訳
『ロビンソン漂流記』 129
- 236 楠山正雄と『国民百科大辞典』 133
- 237 楠山正雄『夢殿』と講談社版『小川未
明童話全集』 140
- 238 140
- 239 136
- 240 133
- 241 129
- 242 126
- 243 123
- 244 119
- 245 115
- 246 112
- 247 108

240	平凡社『世界家庭文学大系』、精華書院、楠山正雄訳『不思議の国』	143	251	木星社書院と山岳書、山と溪谷社と朋文堂	182
241	大村謙太郎と精華書院	146	252	芦谷芦村、日本童話協会、『模範実演童話』	185
242	平凡社、下中緑、権藤成卿『自治民範』	149	253	モウパッサン、広津和郎訳『美貌の友』をめぐって	189
243	平凡社『世界美術全集』と中央美術社	153	254	村越三千男『大植物図鑑』と河野書店版『全植物図鑑』の謎	192
244	杉谷代水と『書翰文講話及文範』	156	255	金児農夫雄、素人社書屋、矢部善三『年中事物考』	197
245	富山房の土井晚翠訳『オヂュッセーア』	160	256	成光館版『名作落語集』と金園社	200
246	ドイツ語版キント『女天下』と沼正三『ある夢想家の手帖から』	163	257	大川屋の講談本『大岡裁判 小間物屋彦兵衛』	203
247	鈴木大拙訳、スエデンボルグ原著『天界と地獄』	167	258	岡村書店と大畑匡山『現代文描写辞典』	207
248	佐々木孝丸訳『ファンニー・ヒル』と解説「十八世紀英京倫敦遊里考」	170	259	三芳屋書店、加藤緑葉『新時代の青年テオン叢書』	210
249	松本苦味訳『どん底』と金桜堂「パンテオン叢書」	175	260	書翰文』と佐藤緑葉 深海泡浪の春江堂『仏教因果物語』と	210
250	近田澄と甲子出版社『精神修養逸話の泉』、「浪六叢書」、「浪六全集』	178			

- 黎明閣『安珍清姫因果物語』 214
- 坂東恭吾と帝國図書普及会 217
- 内外書籍の『花袋全集』とその後 220
- 富永直樹と新詩壇社 223
- 264 山田順子『女弟子』と徳田秋声『仮装人物』 227
- 265 鐵塔書院と兼常清佐『音楽に志す人へ』 230
- 266 京文社、音楽書出版、松永延造『夢を喰ふ人』 233
- 267 帆刈芳之助編著『波瀾曲折巨人の語る人生観』 237
- 268 尾山篤二郎、「稿本叢書」、紅玉堂書店 240
- 269 矢貴書店、桃源社、「澁澤龍彦集成」 244
- 270 泰光堂、河内仙介、和田芳恵『作家達』 248
- 271 和田芳恵と博文館『一葉全集』 251
- 272 近代文芸社『現代詩の作り方研究』、松要書店、巧人社 254
- 273 立川文明堂『明治大正文学美術人名辞書』と大文館『増補古今日本書画名家辞典』 257
- 274 中川玉成堂『元和勇士 山中武勇伝』、立川文庫、池田蘭子『女紋』 261
- 275 大川文庫と作者たち 264
- 276 博多成象堂、武士道文庫、凝香園 267
- 277 緑園『後藤隠岐』と武士道文庫『後藤又兵衛』 270
- 278 柳川春葉『生さぬ仲』と代作者北島春石 274
- 279 脇坂要太郎『大阪出版六十年のあゆみ』と戸川貞雄『第二の感激』 278
- 280 湯川松次郎『上方の出版と文化』と湯川弘文社 282
- 281 崇文館と松山敏『ハイネの詩集』 285
- 282 錦城出版社、大坪草二郎、太宰治『右

- 大臣実朝』 289
- 283 創元社『文芸辞典』と大谷晃一『ある出版人の肖像』 292
- 284 福永書店と徳富健次郎『小説富士』 295
- 285 坂東恭吾と博文館の月遅れ雑誌 300
- 286 松木玉之助、マツキ書店、金鈴社 303
- 287 その後の松岡虎王磨と南天堂 306
- 288 貸本マンガ、手塚治虫、竹内書房 309
- 289 大城のぼる『愉快な探検隊』と中村書店 313
- 290 小熊秀雄（旭太郎）と中村書店 316
- 291 謝花凡太郎『まんが忠臣蔵』と『勇士イリヤ』 320
- 292 貸本屋、白土三平『忍者武芸帳』、長井勝一『「ガロ」編集長』 324
- 293 金の星社と黎明社 327
- 294 石黒敬七監修『趣味娯楽芸能百科事典』と東京書院 330
- 295 橋口景二、研文書院『最新実用家事全書』、大妻コタカ『ごもくめし』 333
- 296 神谷泰治と大京堂 337
- 297 集文館と『和漢故事成語海』 340
- 298 佐藤周一、牧書店、アリス館牧新社 344
- 299 前田文進堂と鈴木重胤『和歌作語大辞典』 347
- 300 平林鳳二、大西一外『新撰俳諧年表』と書画珍本雑誌社 350
- 301 村田松栄館『評判長編講談』と『筑紫巷談妖術白縫譚』 353
- 302 新島広一郎『講談博物志』と講談本出版 356
- 303 講談社「少年講談」と『評判講談全集』 366
- 304 三教書院「袖珍文庫」と集文館「日本歴史文庫」 369

313	中山太郎『日本民俗学辞典』と梧桐書 観』（廣文社）	396	324	膝栗毛』	436
312	高木斐川『政治及社会思想』（教文社） と高木、古賀峡谷編『世界風俗奇聞大	393	323	丸山ゼイロク堂と小川霞堤『蛙の目玉』	432
311	久世勇三『漫画と落語のどぼとけ』、霞 亭会、大鏡閣	389	322	堀内新泉『人間百種百人百癖』	429
310	小笠原白也『女教師』と青木高山堂 『花道全書』	386	321	磯部甲陽堂と岡田三面子『随筆虚心観』	426
309	駸々堂、坪内逍遙『当世書生氣質』、 集』	382	320	香蘭社と木村萩村『自己の為に精神 修養』	423
308	田中宋栄堂と近藤元粹評訂『李太白詩 集』	379	319	会出版部『囲碁定石集』	419
307	石井琴水『変態郷土史』と石田龍蔵 『明治変態風俗史』	378	318	共楽館『名人遺跡囲碁独案内』と丁未 碁』	416
306	天田愚庵『東海遊俠伝』、神田伯山『清 水次郎長』、村上元三『次郎長三国志』	376	317	小川寅松、尚栄堂、吉田俊男『奇美談 於ける珍しい話と面白い噺』	412
305	富士屋書店「長編講談」と『侠客国定 忠治』	372	316	大洋堂、小川菊松、加藤美倫『世界に 金竜堂と原浩三』日本好色美術史』	409
			315	淡海堂と南川潤『心の四季』	406
			314	木村小舟と『図解趣味の仏像』	402
			院		399

335	アルスの円本時代と多彩な企画	474			
334	長田秋涛『図南録』の再刊	471			
333	長田秋涛と中村光夫『贗の偶像』	467			
	『ファブル科学知識全集』	463			
332	安谷寛一、アルス版『ファブル昆虫記』、				
	『大杉栄全集』	460			
331	近藤憲二『一無政府主義者の回想』と				
	論』	456			
330	ロマン・ロランの大杉栄訳『民衆芸術				
	論』と『講談作品事典』	453			
329	吉沢英明編著『講談明治期速記本集				
	同盟発行『義太夫百二十段集』、求光閣	449			
328	岡村書店	445			
327	井上勤訳『アラビヤナイト物語』と				
326	『随筆』と『続随筆文学選集』	442			
	正文堂	439			
325	新栄閣、ダルシイ『欲楽の哲婦』、石渡				
	アルス、カメラ、加藤直三郎『中級写				
	真術』				
336	「写真大講座」と福原信三「芸術写真総				
	論』				
337	中島謙吉、光大社、三宅克己『思ひ出				
	つるま、』				
338	「音楽大講座」と『声楽と歌劇』				
339	アトリエ社、浜田増治、『現代商業美術				
340	全集』				
341	水田健之輔『街頭広告の新研究』と				
	「商業美術研究叢書」				
342	吉田謙吉「バラック装飾社時代」と				
	『現代商業美術全集』				
343	今和次郎、吉田謙吉編著『モデルノロ				
	ヂオ』『考現学採集』				
344	吉田謙吉『築地小劇場の時代』と金星				
	堂				
		501			
		498			
		494			
		491			
		488			
		484			
		481			
		478			
		505			

354	飯田豊二と金星堂「社会科学叢書」	537	366	上村哲彌、先進社「子供研究講座」、第	573
353	『印度芸術』	534	365	先進社『二平全集』と『人の一生』	570
352	アトリエ社と原色版『ヴァン・ゴッホ』	531	364	アルスのバーゲンと東京出版協会の図	
	エルンスト・ディーツ著、土方定一訳	528	363	書祭記念『特売図書目録』	
	藤更生『三月堂』		362	北沢楽天と『楽天全集』	566
351	小川晴暘、島村利正『奈良飛鳥園』、安		361	ナウカ社、『文学評論』、島木健作『獄』	563
350	建築』			『ロシア大革命史』	560
	安藤更生と春陽堂版『銀座細見』	524	360	大竹博吉、ロシア問題研究所、平凡社	
		521	359	二つの『ゴオリ全集』	556
349	石原憲治、秋葉啓、聚楽社『日本農民		358	小山書店と伊藤熹朔『舞台装置の研究』	553
	建築』			『画家論抄』	550
348	『写真集失われた帝都東京』	517	357	洗林堂書房と宇田川嘉彦『フランドル	
	高梨由太郎、洪洋社『建築写真類聚』、			画論』	
		514	356	太田三郎『瓜哇の古代芸術』	547
347	『民家図集』			『拝金芸術』	544
	横山信『図解本位新住家の設計』と	511	355	アドルフ・ロツカー、新井松太郎、麻	
				生義	
346	『民家図集』			アプトン・シンクレアと木村生死訳	540
	今和次郎『日本の民家』と『写真集よ				
	みがえる古民家―緑草会編「民家図				
	集』				
345	加藤彰一の原始社とその出版物	508			

389	ウエルズ『生命の科学』と小野俊一	650	あとがき	692
390	文化学会と『社会思想全集』	654		
391	天人社、『現代暴露文学選集』、中本たか子『朝の無礼』	657	人名索引	710
392	鎌田敬止と矢川澄子『野溝七生子というひと』	660		
393	八雲書林と青磁社	664		
394	小池四郎とクララ社	667		
395	矢川澄子、谷川雁、矢川徳光	671		
396	千代田書院『西條八十詩謡全集』と河野鷹思	674		
397	西條八十「東京行進曲」と磯田光一『思想としての東京』	678		
398	有隣堂と日高有倫堂	681		
399	西條八十と郡司次郎正『侍ニッポン』	684		
400	今西吉雄『今昔流行唄物語』と『少女の友』	688		

近代出版史探索Ⅱ

前回の『近代出版史探索』200の庄野誠一に関連することもあり、文藝春秋社をめぐる一編を加えておく。同180で、文藝春秋社出版部なる名称が菊池寛によって、春陽堂から独立した小峰八郎に貸与されたものだと既述した。またそこで、この頃は文藝春秋社出版部の本に出会わないとも記しておいた。

ところがその後、古本屋の店頭で、ほるぷ出版の日本近代文学館復刻の芥川龍之介『侏儒の言葉』が目に入り、何気なしに手にとったところ、その奥付の発行所が文藝春秋社出版部、発行人が小峰八郎であることに気づいた。それで以前に浜松の時代舎で、芥川の『侏儒の言葉』と『湖南の扇』の二冊を収録した「春秋社版」箱入セットを買ったことを思い出した。

帰って探してみると、その箱入セットが出てきて中身を確かめた。すると箱には「春秋社発行」とあるにもかかわらず、二冊とも文藝春秋社出版部と記載されていた。つまり箱と中身が異なる組み合わせになっていたのである。このような組み合わせを同194で報告したばかりだ。

『侏儒の言葉』と同様に『湖南の扇』もほるぷ出版によって復刻されている。いずれも四六判で、昭和二年に初版が芥川の死をはさんで刊行され、小穴隆一の鮮やかな装丁が印象的である。しかし春秋社の箱に入った二冊はB6判の小型並製で、もはや小穴の装丁の片鱗もとどめておらず、昭和五年十二月に同時に刊行されていることが奥付の発行日からわかる。これらの事情は何を物語っているのだろうか。

おそらく想像するに、文藝春秋社出版部は昭和二年に刊行した芥川の二冊を縮刷版として、同五年に

出版したが、売れ行きが芳しくなかったことと、同出版部が円本後の出版不況の中で経営的に苦しかったことが相乗し、春秋社に在庫ごと販売権を売却したことから、このような箱と中身の版元の異なる事態が生じたのではないだろうか。この時期の春秋社は『近代出版史探索』でも既述しておいたように、松柏館や日月社も擁し、書店部門も抱えていたと推測できるし、この売却はそれらと関係していると考えられる。

小峰八郎の文藝春秋社出版部については『文藝春秋三十五年史稿』の「年譜」の大正十五年のところであつて、同書にはその後の動向に関する明確な記述はない。しかし二冊の縮刷版の巻末図書目録には芥川の著作の他に、菊池寛、久米正雄、山本有三、佐佐木茂索、秦豊吉、正木不如丘などの長編小説や短編集が並び、創業から五年間で、『文藝春秋』と関係の深い著者たちを中心に少なくとも三十冊近くは刊行していると思われる。

そしてその日本橋区小田原町の住所からして、文藝春秋社は麴町区内幸町の大阪ビル内にあつたわけだから、文藝春秋社出版部は別のところで小峰によって営まれていたことになる。しかし春秋社への在庫の売却を機にして、文藝春秋社出版部は整理され、文藝春秋社へと吸収される過程をたどつたのではないだろうか。大正十二年に菊池寛の個人経営として始まつた文藝春秋社も昭和三年に株式会社へと移行し、薬品その他の通信販売の代理部、麻雀牌の製造販売の麻雀部と同様に、出版部もまた収支損益を明らかにする必要に迫られていったことと密接に関係しているのだろう。『文藝春秋三十五年史稿』はそのことを遠回しに述べている。

「これより先き「文藝春秋社出版部」という名称を、社外のある個人に許した等のことと同じく、代理

部といい、麻雀部といい、経理上明朗を欠く点が生じ後々に禍根を残すことになった。」

これ以上文藝春秋社出版部に関する具体的な言及はないが、昭和六年に起きた、編集部を中心とする広告部や経理部を含んだ社内根本的な整理と改革を経て、出版部も解体され、文藝春秋社内へと吸収されたと見ていいだろう。

たまたま昭和七年に刊行された兼常清佐の『音楽概論』が手元にある。これは全二十四巻が出された「音楽講座」の第一篇であるが、発行所は内幸町大阪ビルの文藝春秋社で、編輯兼発行人は同所の廣田義夫となっていて、もはや出版部も小峰の名前も消えてしまっている。それゆえにこの時期に出版部が整理されたと考えて間違いないと思われる。

しかし明らかにされていない、このような出版部の整理と消滅は、その後の文藝春秋社の書籍出版に何らかの影響と余波を及ぼしたようで、『文藝春秋三十五年史稿』収録の「出版総目録」は昭和十五年からの刊行物から始まっていて、それ以前の書籍についてはリストアップされていない。昭和七年頃から十四年にかけての文藝春秋の書籍は、過渡期の出版物に属しているのであるか。また前回ふれた庄野誠一はこの時期に出版部へ移っていたはずだ。

そればかりか、ほぼ三十年後に出された『文藝春秋七十年史《本篇》』（平成三年）において、続刊の『文藝春秋七十年史《資料篇》』（平成六年）に「『図書』総目録」の収録が予告されていたにもかかわらず、その内容は「『文藝春秋』総目録」だけで終わってしまい、「『図書』総目録」は実現しなかったのである。

だがそれでも『文藝春秋七十年史《本篇》』には、『文藝春秋三十五年史稿』にはなかった小峰に関する

る記述が見られる。それによれば、小峰は春陽堂に長くいて、菊池の第一作を編集担当したことで、菊池の信任を得て、文藝春秋社出版部を許され、「僕が出版をやる訳ではないが名称をゆるした以上、監督もするし責任を負う」との菊池の言、昭和三年から八年にかけて、小峰を『文藝春秋』の発行名義人にすえていたことなどが記されている。やはり出版部も菊池のダミー、別働隊であったと判断してもかまわないであろう。おそらくそのようにして、馬海松の『モダン日本』、田中直樹の文化公論社における『文学界』や『犯罪公論』も成立したのではないだろうか。

それらのことと、文藝春秋社が刊行した書籍の全貌はまだ明らかにされていない。

202 宇野浩二『文芸夜話』と金星堂「随筆感想叢書」

『近代出版史探索』176などで数回にわたってふれてきた新潮社の「感想小品叢書」とよく似たシリーズが、新潮社をライバルとして文芸出版を始めていた金星堂からもほぼ同時期に刊行されているので、それも挙げてみよう。これは前回の文藝春秋社の命名も関係しているからだ。

以前に古書目録で、宇野浩二の『文芸夜話』を見つけ、かなり安い古書価だったので、何気なしに申しこんだことがあった。その理由は目次の落丁ゆえだったが、運よく送られてきた。大正十一年に金星堂から出された一冊で、本当に前半の百九十ページほどの部分の目次が欠けていて、本文を確認してみると、それは「文芸閑話休題」や「随筆雑篇」にあたっていた。目次もないので、中身を確かめるためにまず前者に目を通してみた。すると宇野特有の語り口によって、最近の大阪行から喚起された様々な

思い出が述べられていて、読みふけてしまった。それほど長くはない最初の文章の中に、明治後半から大正にかけての大阪の町やその変遷が語られ、宇野の大阪を舞台とする作品の補注のように読むことができる。例えば、それは次のような一文だ。

「或町は、少々大きくなつたが私が、心の中で密かに慕つてゐた女を、その女が私の住んでゐた隣の家から、ずつと離れた方の或色町に、今考へて見ると誰かの多分妾にでもなつたのだらう、煙草屋になつて引越して行つた。そこへ必ず一週間に一度くらゐづゝ、少年らしい感傷的な心持を抱いて歩いていつた。その時の町筋の一つであつた、(後略)」

宇野が中学時代を送つたのは大阪花柳界の宗右衛門町の近くで、その土地柄とそこで暮らす少年の心象がこの一文に表出し、彼の文学の原風景を形成したように思われる。

また宇野は十年前の友達との大阪行も語っている。それは大学の同級生の斎藤青羽との大阪行で、スポンサーつき同人雑誌の刊行のためだった。宇野はそのタイトルを示していないが、それは『しれえね』で、そこに掲載された三上於菟吉の小説のために創刊号が発禁処分を受け、二号刊行の画策が必要となり、大阪へ向かった。しかし二人は素人下宿で二ヵ月以上過ごしたにもかかわらず、その二号は出されずに終わってしまった。

『しれえね』に関しては、紅野敏郎の『文芸誌譚』（雄松堂）、及び「出てきなさい！ しれえね…」『しれえね』と私』に詳しい。

二人のその間の大阪生活も興味深いが、それよりも同行の詩人の斎藤青羽に関心が向いてしまう。宇野は青羽の詩を三つ以上見なかつたと書いているが、その一つの二行詩を覚えてしまったこともあって、

それを引いている。それは「悲しき日の夕べには入り日を眺め、古りし日の古りし歌をうたひにき」というもので、その詩を知ることによって、宇野は青羽と友達になったのである。

青羽は、人見東明、加藤介春、福田夕咲、三富朽葉、今井白楊たちが明治四十二年に結成した自由詩社の一人だった。自由詩社は機関紙『自然と印象』により、青羽の詩のような現実の甘美な哀愁やメランコリックな気分を表現する詩も多かったが、三富朽葉のような象徴詩人を生み出したことで、「詩の革命派」ともされている。しかし青羽は『日本近代文学大事典』にも立項されておらず、またその他の詩についても未見である。ただ宇野によれば、その後外国語学校のフランス語科にあらためて入学し、そこで生まれ変わったように勤勉な学生となり、秀才として卒業し、フランスに留学したようだ。別名を犀東日露士としていた、その後の青羽の行方はどうなったのだろうか。

宇野浩二のこの『文芸夜話』は中表紙も含んだ目次部分の欠如もあつてか、その記載もなかったので、単行本だと思いきんでいた。ところがある時、紅野敏郎の『大正期の文芸叢書』を見ていて、これが金星堂の「随筆感想叢書」の一冊であることに気づいた。宇野の他にも佐藤春夫、芥川龍之介、谷崎潤一郎、菊池寛、田山花袋などの著作が収められ、それらは三六判のフランス装、ポプリン表紙で統一されているようだ。紅野は記している。

「この金星堂の『随筆感想叢書』は、新潮社の『感想小品叢書』と対になっているもので、大正文学の特質の一つとなっている私小説、心境小説のありようともからみあわせて考えていくべき要素を持っている。(中略)

「随筆感想」である故に、著者自身のナマミの姿、本音を聞くことが出来、それが当時の文壇の状況を

と」が述べられ、次のような言葉が記されている。

「(前略) 社会主義運動の独立化後間もなく幸徳事件の勃発あり、社会主義運動は峻厳なる弾圧の下に置かれ、多くの社会主義書も亦、その著訳書と均しい迫害を被つた。かくして国禁の烙印を帯びさせられて読書界から姿を消した既刊書を追跡することの困難もさることながら、或は秘密出版として或は種々のカムフラージュを用ゐて出版流布せられた諸文書を今日蒐集することの困難は殆んど絶対に近い。加ふるにこれら禁断書の数少ない避難所であつた社会主義者は屢々不断的迫害の下に、或は家宅搜索、或は転々流浪の生活、或は生活の窮乏等のために、彼等の貴重なる蔵書の全部又は一部を失はざるをえなかつた。かくて加へてかの大震災は辛うじて生残したこれら極めて珍貴なる諸文書の少からざる部分を灰燼に帰せしめたと云はれてゐる。此様な事情の下にあつて完全なる本邦社会主義文献誌を編纂することは想像以上の難事であるとともに、その必要もまた此上なく大きいのである。」

今ではもはや忘れ去られてしまつてゐるかもしれないが、出版という行為が常にこのような国家権力との緊張を孕み、読むことも所有することも危機にさらされる事態を覚悟しなければならぬ時代も長く続いていたのだ。それは社会主義書ばかりでなく、性をめぐる言説から、詩や小説に至るまで、そのような社会状況の中で刊行されてきたことになる。しかもそれは近年になつても続いていたし、現在もまたかたちを代えて存続しているといつていい。

またこの『日本社会主義文献』第一輯の実際の編纂は、同研究所図書部員の内藤赴夫によるもので、それは『近代出版史探索』¹⁸²などでもふれてきた木村毅の懇篤なる協力を受けているという。おそらく大正四年以後の第二輯も構想され、資料収集も進んでいたらと想像されるが、同人社の退場によってそれ

は実現しなかったのではないだろうか。なお同書巻末には百冊近い単行本の「同人社出版図書目録」が収録されていて、これも偶然のように思われない。

それにしても同人社と大島のその後はどうなったのだろうか。『大原社会問題研究所五十年史』を通読してみて、あらためて社会主義とその研究の視点から見ると、いわば出版が端女の立場にあることが察せられる。同書には研究所の多くの人々の集合写真が口絵として掲載されているのだが、そこに大島の名前は見られない。前回記した大島の経歴からすれば、彼は研究所の不可欠のメンバーだったと思われるのに。

同人社の後を引受けた栗田書店、それらを戦後になって継承したと見なしてもいい法政大学出版社局のことはまた別のところで語ることになるだろう。

235 楠山正雄『近代劇十二講』

しばらく飛んでしまったが、大正時代の戯曲や演劇のことにもう一度ふれてみたい。

大正時代の戯曲や演劇をめぐって何編か書き、『秋田雨雀日記』なども参照してきたが、それらに必ず登場してくる人物がいて、それは楠山正雄である。金子洋文の『投げ棄てられた指輪』の巻末広告にある新潮社の海外演劇のストリンドベルク、メエテルリンク、ヴェデキントなども彼の翻訳となっているし、本書205の年表で示した様々な劇団にも関係し、その名前が広く見出される。

そしてゴシップ的にいえば、『秋田雨雀日記』に苦々しげに書かれているように、島村抱月の死後、

- 130, 176-77
 引頭百合太郎 156
 ヴァーツラフ・ニジンスキー
 669-70
 ヴァスィリー・エロシェンコ
 12
 ヴィッキイ・パウム 54
 宇井伯壽 603
 ウィリアム・グリス 107
 ウイルデンブルク 148
 ヴィルヘルム・ベルシェ
 105
 植竹喜四郎 63, 66-7
 上田保 338, 340, 609-10
 上田敏 91
 上田由太郎 79
 上畠益三郎 88
 上原才一郎 116
 上村勝弥 574
 上村勝也 578-79
 上村清敏 574, 578
 上村哲彌 577-79
 植村正久 293
 ウォルト・ホイットマン
 287
 ヴォルフガング・シヴェルプ
 シュ 494
 宇崎祥二 294
 宇佐美承 319
 白田亜浪 617, 620
 宇高兵作 96
 宇田川嘉彦 550
 内田伝一 464
 内田秀男 94
 内田魯庵 142, 605
 内村鑑三 582
 内村順也 582
 内本実 489
 内山兼堂 186
 宇野浩二 4-6, 63-4, 66-7, 70,
 92, 142
 宇野千代 104
 生方敏郎 381
 梅田俊英 40, 43-5, 104, 119-
 20, 123
 梅津勝夫 25
 梅原北明 58, 79, 100, 170,
 379, 399, 437, 436, 443, 445,
 548
 梅原龍三郎 33
 ウラジーミル・レーニン
 44-6
 瓜生卓造 183-84
 永戸俊雄 54
 江口清 36
 エゴン・シーレ 131
 エドゥアルト・フックス
 517
 江藤潔 171-73
 エドガー・アラン・ポー
 177
 エドガー・ウォーレス 642
 江戸川乱歩 407, 562, 568,
 636, 641-43, 645
 エドモンド・バックレイ
 436
 エドモン・ド・ゴンクール
 130
 エドモンド・デ・アミーチス
 144
 エドワード・ウィリアム・レ
 イン 448
 エドワード・サイード 446
 エドワード・C・ヘグラー
 169
 榎本秋村 441
 榎本文雄 396
 江場千代松 461
 海老原丑之助 397
 エマ・ゴールドマン 541
 エミール・ヴェルハーレン
 551-52
 エミール・ゾラ 30, 35, 60,
 114, 393-94, 439, 442, 682
 江見水蔭 271, 391
 エルンスト・ディーツ 534-
 35, 537
 エルンスト・ローベルト・ク
 ルツイウス 28
 エレナ・ポーター 145
 円地文子 228
 小穴隆一 1
 大江恒吉 522
 大川錠吉 264
 大木惇夫 7, 539
 大木篤夫 465
 大口理夫 536
 大隈重信 110, 127
 大隈信常 472
 大熊喜邦 513
 大河内伝次郎 685
 大澤貞蔵 439
 大澤得二 196
 大澤正道 543
 大下藤次郎 153
 大島匡助 439, 442
 大島憲二 677
 大島秀雄 122-23, 126

- 627, 635
 生田長江 64, 66, 133, 307
 生田蝶介 7, 540
 井口孝親 120
 池内紀 131
 池田修 446
 池田大伍 18
 井家忠男 154, 156
 池谷信三郎 648
 池田義信 627
 池田蘭子 261, 263-64, 357
 池部釣 74, 581
 池村鶴吉 450-51
 石井鶴三 487, 568
 石井琴水 379
 石井研堂 198, 380, 689
 石井柏亭 155
 石躍信夫 286-88
 石川謙次郎 373
 石川三四郎 105, 113, 150, 655
 石川淳 528
 石川啄木 205
 石川千代松 651-52
 石川寅吉 415
 石川正雄 374
 石黒敬七 331
 石黒忠篤 513
 石坂養平 59
 石田英助 314
 石田龍蔵 379-81
 石塚純一 91
 石野観山 442-43
 石野径一郎 304
 石橋思案 215
 石浜知行 41, 120-22
 石浜金作 648-49
 石原憲治 521-22
 石山徹郎 56
 李修京 41
 泉鏡花 205, 274-75, 418, 448
 伊勢貞夫 244
 磯田光一 69, 680-82
 磯部辰次郎 240, 426
 磯山盛雄 218
 伊多波英夫 111-12
 板谷吉太郎 432
 市川猿之助 17-8
 市川正一 44
 市川壽美蔵 18
 市川義雄 44
 市古貞次 589
 市島春城 472
 市村俗仏 277
 井出孝平 508
 伊藤嘉一 380
 伊藤喜久造 639
 伊藤熹朔 553-55
 伊藤銀月 91
 伊藤松宇 600
 伊藤信吉 213
 伊東深水 646
 伊藤大輔 685
 伊藤整 48, 86, 565
 伊藤竹酔 60, 547
 伊藤痴遊 79, 645
 伊藤野枝 460
 伊藤博文 468
 伊藤松五郎 380
 伊藤道郎 554-55
 伊藤靖 41-2
 伊東芳次郎 73
 伊東六郎 57-9
 稲岡勝 422
 稲岡奴之助 391
 稲垣足穂 586
 犬養健 648-49
 井上勇 442
 井上勝五郎 451
 井上十吉 54
 井上精一郎 295
 井上勤 446-48
 井上哲次郎 603, 605
 井上当蔵 54
 井上日召 614
 井上正春 235
 井上豊 665
 猪木卓二 443, 445
 猪俣津南雄 655
 今井徹郎 182
 今井白楊 6
 伊馬鶴平 54
 今西吉雄 688-91
 今野賢三 15, 32
 今村謙吉 293
 今村次郎 206, 454
 岩下小葉 635
 岩田誠一郎 190
 岩田専太郎 638-40
 岩田豊雄 466
 岩波茂雄 230
 岩野泡鳴 14, 683-84
 岩橋遵成 605
 岩淵達治 131
 岩谷山梔子 616
 巖谷小波 186-87, 215, 406, 600
 イワン・ツルゲーネフ 8,

人 名 索 引

- あ行**
- アーネスト・ヘミングウェイ 657
- 靉黧居士 79
- 会津八一 118, 528-31
- 青木育志 390-91
- 青木月斗 352
- 青木茂 531
- 青木恒三郎 390
- 青木正児 386
- 青木美夫 79
- 青野季吉 443, 577
- 青柳若雄 439, 441
- 青山杉作 18
- 赤壁徳彦 513
- 赤松克麿 655
- 赤松義麿 56
- 秋田雨雀 12-5, 19, 127, 142, 146, 149, 177
- 秋野村夫 441
- 秋元膳一朗 532
- 芥川龍之介 1-2, 6, 650
- 朝倉剛 37
- 朝倉治彦 178
- 浅野孟府 499
- 浅野弥太郎 79
- 朝比奈知泉 80
- 蘆原英了 54
- 芦谷重常 185-88
- 飛鳥哲雄 499
- 足助素一 12, 14, 19-26, 33-4, 43-4, 78, 461
- 足助たつ 22
- 麻生義 540, 542-43
- 麻生武治 182
- 麻生久 41, 394
- 足立欽一 227-28
- 足立巻一 259, 261, 263
- 足立源一郎 532
- 渥美清 301
- アドリエンス・モニエ 35
- アナイス・ニン 672
- アナトール・フランス 177
- 穴山篤太郎 682
- 姉崎正治 472
- アプトン・シンクレア 544-46
- 安部磯雄 655
- 阿部次郎 130
- 安倍能成 682
- 天田愚庵 378-79
- 天野哲夫 164
- 新井泉男 502
- 新井松太郎 540, 542
- 荒川実蔵 44
- 荒川洋治 675
- 荒城季夫 548
- 荒畑寒村 108, 462, 477, 654-55
- アラン・ドロン 131
- 有島武郎 12, 14-5, 19-25, 33, 43, 113
- 有本芳水 631, 633
- アルトゥル・シュニッツラー 130-32
- アルフレッド・キント 165
- アレキサンダー・ポープ 162-63, 171
- アレクサンダー・バークマン 465
- アレクサンドル・デュマ 98, 469
- 淡路呼潮 277
- 安齋育郎 40
- 安西徹雄 347
- 安藤更生 524-31, 681
- 安藤忠義 528
- 安藤礼二 667
- アンドレ・ジイド 26
- アンドレ・ミシェル 154
- アントワヌ・ガラン 446
- アントン・チャーホフ 57, 178, 509-10
- アンナ・ブブノワ 654
- アンリ・バルビュス 32-4, 38, 40
- アンリ・ベルクソン 96
- 飯**尾謙蔵 619-20, 622-23
- 飯沢耕太郎 479, 485-86, 492
- 飯島正 54-5
- 飯田旗軒 114
- 飯田豊一 453, 456, 637, 540
- 飯田豊二 538-39, 544
- 飯塚徳太郎 186
- 五十嵐力 91
- 五十嵐利治 498
- 井狩春男 268
- 生田春月 64, 66, 239, 255,

小田 光雄 (おだ・みつお)

1951年、静岡県生まれ。早稲田大学卒業。出版業に携わる。著書に『図書館逍遥』(編書房)、『書店の近代』(平凡社)、『〈郊外〉の誕生と死』、『郊外の果てへの旅／混住社会論』、『出版社と書店はいかにして消えていくか』などの出版状況論三部作、インタビュー集『出版人に聞く』シリーズ、『出版状況クロニクル』Ⅰ～Ⅴ、『古本探究』Ⅰ～Ⅲ、『古雑誌探究』、『近代出版史探索』(いずれも論創社)。訳書に『エマ・ゴールドマン自伝』(ぱる出版)、エミール・ゾラ「ルーゴン＝マッカール叢書」シリーズ(論創社)などがある。

『古本屋散策』(論創社)で第29回Bunkamuraドゥマゴ文学賞受賞。

ブログ【出版・読書メモランダム】<http://odamitsu.hatenablog.com/>に「出版状況クロニクル」を連載中。

近代出版史探索Ⅱ

2020年5月20日 初版第1刷印刷

2020年5月30日 初版第1刷発行

著 者 小田光雄

発行者 森下紀夫

発行所 論創社

東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル

tel. 03 (3264) 5254 fax. 03 (3264) 5232 web. <http://www.ronso.co.jp/>

振替口座 00160-1-155266

装幀／鳥井和昌

印刷・製本／中央精版印刷 組版／ロン企画

ISBN978-4-8460-1943-3 ©2020 Oda Mitsuo, printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

日本音楽著作権協会(出)許諾番号 2003860-001号